

特集：道徳・価値教育に関する論考

ヤスパーズにおける道徳教育論について

ー理性による自己生成の観点から

豊 泉 清 浩

(文教大学教育学部)

Theory of Moral Education according to Jaspers

-From Perspective of Self-Development based on Reason

TOYOIZUMI SEIKOU

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

「特別の教科道徳」が設置される状況の中で、「道徳科」に示唆するものを、ヤスパーズの教育哲学に基づく道徳教育論に求める。ヤスパーズ教育哲学においては、人間の真実の在り方である実存は生成してゆくものであり、自己存在は同時に、真の自己となってゆくこと、すなわち自己生成である。本稿の目的は、ヤスパーズの道徳教育論について、理性による自己生成の観点から考察するとともに、その考察を通して、価値多元の民主主義国家において、諸価値の中から自ら選択し、決断して、主体的に生きていく人間の育成に示唆するものを検討することにある。

はじめに

わが国の学校における道徳教育は、「道徳の時間」が教科となる方針により、大きく変わろうとしている。2015（平成27）年3月の小学校および中学校の『学習指導要領』の一部改正により、従来の「道徳の時間」は、「特別の教科道徳」となり、「道徳科」とも称されるようになる方向が示された。

一部改正された『学習指導要領』によれば、学校における道徳教育は、「道徳科」を要として学校の教育活動全体を通じて行なうものであるという理念が示されている。これは「道徳の時間」の性格と同様であり、「道徳の時間」を継承している。しかし、「道徳の時間」と「道徳科」の目標には、若干の違いが見られる。すなわち、「道徳科」は、「道徳的諸価値」についての理解を基にすることを重視している。小学校、中学校とも、「道徳的諸価値」として、細かく22の項目が挙げら

れている。「道徳的諸価値」についての理解に重きが置かれるのは、習得すべき内容を明確にし、より一般の教科に近づけようとする意図があるものと推察される。

「道徳的価値」とは何かを規定することは難しいが、それは、人間の行為に関して、人が何を「よい」と思い、「望ましい」と思うか、何を「大切」で、「役に立つか」と思うのかの対象となる客観的な性質であると考えられる。したがって、『学習指導要領』における「道徳的諸価値」には、人間にとって「望ましい」行為が列記されていることになる。だが、「道徳的諸価値」について理解を深めることは大切であるが、価値を覚えることに道徳教育の目的があるのではなく、それを実践できるかにかかっていることはいうまでもない。

さて、道徳教育は、規範やマナーを教えるだけではなく、人間としての生き方を形成す

ることを目的としている。しかし、生き方そのものを教えることは難しい。なぜなら、本人が自ら決断し、自分の人生を歩んでいくしかないからである。つまり、「道徳的諸価値」は、その人が人生を歩んでいく際に、道標となる価値といえることができる。こうして道徳教育の現状を省みると、道徳教育は、その在り方を問い続けながら、前進していかなければならないことがわかる。

本稿では、「特別の教科道徳」が設置される状況の中で、「道徳科」に示唆するものを、ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) の教育哲学に基づく道徳教育論に求める。なぜヤスパースかといえば、ヤスパースの哲学は、もともと倫理学的性格が強い⁽¹⁾からであり、実存 (Existenz) という人間の真実の在り方を探究し、また国民教育の基盤に理性に基づく民主主義がなければならないと主張しているからである。ヤスパースは、実存と理性 (Vernunft) は相互に依存する概念であると考える。つまり実存は、理性によってのみ現実的となる。ヤスパース教育哲学においては、実存は生成してゆくものであり、自己存在 (Selbstsein) は同時に、真の自己となってゆくこと、すなわち自己生成 (Selbstwerden) である。

本稿では、自己生成の契機として、「限界状況 (Grenzsituation)」、「実存的交わり (die existentielle Kommunikation)」、「わがものにすること (Aneignung)」などについて見て、自己生成と道徳教育との関係について言及する。そしてわが国の学校教育の基盤となる民主主義と道徳教育との関係、その前提となる教師と生徒との関係について考察する。ヤスパースにおける道徳教育論とは、教育哲学と一体となっているものであるが、自己生成を根拠にして、道徳教育並びに人間形成におけるより現実的、実践的な課題への示唆を含むものと捉える。それゆえ本稿の目的は、ヤスパースの道徳教育論について、理

性による自己生成の観点から考察するとともに、その考察を通して、価値多元の民主主義国家において、諸価値の中から自ら選択し、決断して、主体的に生きていく人間の育成に示唆するものを検討することにある。

1. 限界状況と実存的交わり

ヤスパースにおける自己生成の出発点となるのが、限界状況である。ヤスパースによれば、われわれは常に諸々の状況の中にある。それらの状況は変化し、いろいろな機会が現われてくる。ところが、状況の中には、本質的には常に不変であるような状況がある。ヤスパースはいう。「私は常に状況の中にあること、私は闘争や苦悩なしに生きられないこと、私は不可避免的に負目をわが身に引き受けること、私は死ななければならないこと、このような状況を、私は限界状況 (Grenzsituationen) と名づける。限界状況はそれ自体変わることがなく、ただその現象においてのみ変化する」⁽²⁾と。つまり、限界状況は、われわれが突き当たり、挫折する壁のようなものである。限界状況は、現存在における意識にとっては存在しない。それゆえ、「諸々の状況が内面的に留まっている意識に属するように、限界状況は実存に属する。」⁽³⁾

ヤスパースは、個々の限界状況として、「死 (Tod)」、「苦悩 (Leiden)」、「闘争 (Kampf)」、「負目 (Schuld)」を挙げている。諸々の状況の中でも、人間が本来的に生きていくために飛躍をさせる契機となるのは、死であり、とりわけ自分の死である。そして、「あらゆる苦悩の背後に死がある。」⁽⁴⁾ 死と苦悩は、人間が生きていく上で常につきまとっている状況であるのに対して、闘争と負目はわれわれの行為と関係する意識的な状況であるといえよう。

さて、われわれが限界状況に対処する仕方には二つあると考えられる。まず一つには、実存ではない現存在としてのわれわれは、限

界状況を前にして目を閉ざすことによるのみそれらを回避することができる。だがそれでは、究極的にわれわれを放棄すること以外の何物でもない。それゆえ、われわれは限界状況を克服するために、われわれにおける「可能的実存の生成」によって有意義に限界状況に反応する⁽⁶⁾。すなわち、限界状況に直面してそれを受け入れることによって、われわれは真の自己である実存となるのである。それゆえ限界状況は、実存にとってのみ、現実として感得されるものとなる。したがってヤスパースは、「限界状況を経験することと実存することとは、同じことである」⁽⁶⁾という。

ところで、限界状況の体験は、孤独の自覚のことでもある。しかし、われわれは孤独の中でのみ、真の自己になるのではない。他者との交わりに入っていかなければならない。

ヤスパースは、『哲学第2巻実存解明』においては、交わりを、「現存在の交わり (die Daseinskommunikation)」と「実存的交わり」とに二分している。これに対して後期に入り、『理性と実存』(1935)以降、『真理について』(1947)などにおいては、交わり概念は、「包括者 (das Umgreifende)」概念の影響によって、細分化され、「現存在の交わり」、「意識一般の交わり (die Kommunikation des Bewußtseins überhaupt)」、「精神の交わり (die Kommunikation des Geistes)」そして「実存的交わり」ないし「実存の交わり (die Kommunikation der Existenz)」とさらに包括者の諸様式の紐帯 (Band) である理性による「理性的交わり (die vernünftige Kommunikation)」ないし「理性の交わり (die Kommunikation der Vernunft)」となった。

現存在の交わりでは、自己が他者と共にあっても自己であることの自覚すらしないような交わりがなされ、意識一般の交わりでは、だれもが共通に持っている意識による交わりがな

され、精神の交わりでは、物事の理念に基づく交わりがなされるのである。ところが、これら三様の交わりでは、自己がどう生きるべきかを示唆する、人間存在における根源的な対話はなされないで、そこに不満が生じる。その不満から実存的交わりへ飛躍することになる。

実存的交わりは、最も高度な交わりであり、真の交わりである。実存的交わりは、可能的実存の間で成立しうる交わりである。実存的交わりに入るには、人は孤独を欲しなげなければならない。そして二者間においてそれぞれが超越者 (Transzendenz) と連繋している実存的交わりでは、二人がお互いに自己の心を限りなく相手に対して開いて共に自分が明らかにになり、同等の水準に立ち、自己の闘いと相手の闘いとが一つである「愛しながらの闘い (liebender Kampf)」⁽⁷⁾をするのである。この「愛しながらの闘い」において、本質的に他者と断絶している窓なき単独者同士が、超越者において、すなわち永遠によって無時間的に結びつきつつ、共に真の自己となるのである。

ところで、ヤスパースは、『大学の理念』(1946)において「教育の基本形式 (Grundformen der Erziehung)」について考察しているが、その一つである「ソクラテス的教育 (Sokratische Erziehung)」⁽⁸⁾の核心は実存的交わりである。ヤスパースは、ソクラテス的教育を本質的には大学生を対象とする教育形態であると考えているが、それは実存的交わりによる自己生成への教育方法を示唆している。

ソクラテス的教育では、教師と生徒は、自覚に基づいて同等の水準に立っている。そこには固定的な教説は存せず、限りない問いと絶対者はわからないという無知とが支配する。それで個人の責任は極限にまで高められ、その責任はどこでも軽減されない。教育は「助産的」である。すなわち生徒の内にある諸力

が生まれ出るように教師が助け、生徒の内にある諸可能性が目覚められるが、外から押しつけられるのではない。ソクラテスの教師と生徒の間には過程としての闘争する愛 (kämpfende Liebe)があるだけであって、従属的な追従はない。

さて、限界状況や実存的交わりは、日常的な出来事としてわれわれの生活に現われるものではなく、むしろ自己の主體的な生き方を決する契機である。したがって、日々の生活において自己存在にかかわる契機としては、「自己反省 (Selbstreflexion)」が重要となる。自己反省とは、日々の生活の中で自己の在り方を省みることである。

ヤスパースによれば、「自己反省においては、私はだれであるか、という問いが新たな仕方ではなされる。」⁽⁹⁾ すなわち自己反省では自己存在が問われる。そこで彼は次のようにいう。「実存的な自己反省において私は、自分に関する自分の判断から生ずるものとしての自分を求める。その判断は、自己反省における自己存在の真剣さであって、その真剣さは、意識一般の判決の基礎になっている、私の単なる知識欲からは生じえない。自己反省することの中から、私の存在の源泉が発する」⁽¹⁰⁾と。つまり、自己反省を通して実存が生起しうる。

このように自己反省は、自己存在に根源を持ち、真の自己となる方途である。それゆえ自己反省は、自己存在を問うことであり、まさに日々の自己生成の歩みそのものといえるであろう。

2. 「わがものにすること」と自己生成

ヤスパースにおける「わがものにすること」概念は、歴史的伝承を選択して受容することによる自己生成の契機である。その際「わがものにすること」は、自己が可能的実存として超越者との関係に入る過程において、歴史的伝承を変革しながら受容することである⁽¹¹⁾。

ヤスパースは『哲学第1巻 哲学的世界定位』(1932)において、哲学することを哲学の歴史との関連において捉えている。その場合彼は、伝承の意義が気づかれず吟味もされない「同化作用 (Assimilation)」と、伝統を明白な意識によって自分自身に関係するものとして選択し、自己を生成しつつ同化する場合の「わがものにすること」とを区別している⁽¹²⁾。ヤスパースによれば、「わがものにすることは、可能的実存がその中で他の実存の自己存在と出会うことを求める過去のものに頼っている。」⁽¹³⁾つまり「わがものにすること」は、歴史的伝承を通して可能的実存が他の実存と出会うことを意味する。そしてヤスパースは、われわれが過去を学ぶ際、特に哲学の学習が大切であると強調する。彼は、「過去の哲学的思索をわがものにすることは、テキストを理解することによって成就する」⁽¹⁴⁾と述べている。

ところで、ヤスパースは、『大哲人たち第1巻』(1957)において、大哲人たちの思想と触れ合うことの意義に関して、「大哲人たちとの交際 (Umgang) を通して、私は私の自己教育の一つの道を選ぶ」⁽¹⁵⁾と述べている。彼は、大哲人たちとの交際に、自己生成の一つの方途を見出している。その際、どの人物を偉大と見なすかが問題となる。ヤスパースは、「私がどのような人物を偉大と見なすかによって、私がどんな人間であるかが明らかになる。私が偉人をどのように見て、偉人とどのようにかかわり合うかによって、私は私自身となるのである」⁽¹⁶⁾という。つまり自己は、どのような人物を偉人と見なすか、またその偉人といかに交際するかによって真の自己となりうる。すなわちヤスパースによれば、「偉人を見る人は、自己自身であるべきことを要求される。」⁽¹⁷⁾ 偉人たちを熟視することを通して、われわれは自己の生き方や決断をも、偉人たちを通して獲得するのである。

このように、「わがものにすること」は、自己が歴史的伝承を、自己の生き方に決定的な影響をもたらすものとして、選択して受容することを意味している。つまり、「わがものにすること」は、人物の伝承に限っていえば、自己がどのような人物を偉大と見なすかと同じ意味であると考えられる。このような人物の伝承との出会いは、人間の生き方を形成する道德教育と深く関連する側面を持っている。つまり、「わがものにすること」は、自己の生き方を決定的に方向づける契機として、道德教育的要素を持っていると考えられる⁽¹⁸⁾。

「わがものにすること」概念を、偉人の生き方に学ぶ道德教育の理論的根拠とする場合、実際には次のようなことが考えられる。テキストを理解し、偉人の思想をわがものにすることは、道德の授業に当てはめてみると、偉人の伝記を扱った読み物資料から、強い感動を受け、その人物のような生き方をしたいと願うことに対応する。たとえば、野口英世の伝記から強い影響を受け、そのような生き方をしたいと強く願い、医師を志す決意をすること、あるいはオリンピックに出場した選手の伝記を通して、自分もオリンピックに出場したいと願い、日々の厳しいトレーニングに励むことなどが、その例である。先人の伝記は、わが国や外国で有名な偉人と見なされる人物ばかりではなく、地域や郷土の身近な人物でもいい。ただ、同じ資料を読んだすべての児童生徒が、その偉人の生き方に強く感動し、そのように生きたいと思うわけではない。あるいは、その程度の分量の資料では、そのような生き方をしたいと思うまでに至らないかもしれない。しかし、そうした資料を用いて授業を展開することは、児童生徒が、その人物のような生き方をしたいと感動する契機となる可能性を持っている。児童生徒がその偉人に強く心を動かされ、そのような生き方をしたいと願うことは、その児童生徒がその偉

人の生き方を選択して受容することによって、多様な価値観の中から主体的に自己の生き方を決断したと見ることができる。それゆえ、児童生徒が偉人の生き方から学び、強い感動を伴い、目標となる生き方を自覚することを、「わがものにすること」と捉えるのである。

3. 自己生成と道德教育

ヤスパースは、「実存は、自分自身との闘争である自己生成の過程の内にある」⁽¹⁹⁾と述べている。このように、自己存在は自己生成であることを自覚することが、ヤスパースにおける実存概念の特徴を理解することになると同時に、ヤスパースの教育哲学の核心を把握することになる。

ところで、ヤスパースの包括者概念は、自己生成の構造を示している⁽²⁰⁾。包括者は、哲学的論理学の内実であり、存在の自覚的形式のことである。包括者は、われわれ自身と存在そのものの諸様式に分けられている。包括者は、われわれ自身としての内在的なものが、現存在（Dasein）、意識一般（Bewußtsein überhaupt）、精神（Geist）であり、われわれ自身としての超越的なものが、実存である。

現存在は、時間・空間の内に現われる現実的存在であり、生そのものである。意識一般は、すべての人が共通に持っている意識である。精神は、思惟・感情・行為に結びついていて全体性であり、理念である。実存は、超越者と関係している自己存在であり、本来的な自己存在である。

そして、存在そのものとしての内在的なものが世界（Welt）であり、存在そのものとしての超越的なものが、超越者である。これらの包括者の諸様式のわれわれの内なる紐帯が、理性なのである。

こうして哲学的論理学は、理性を基盤にして可能的実存が実存を目指して歩む自己生成の過程を論理的な構造として示したといえよう。ヤスパースは、「哲学しつつ己れ自身

の中で己れを解明しながら、理性は哲学的論理学を展開する。哲学的論理学は、理性の自己意識あるいは理性の機関と名づけることができる」⁽²¹⁾と述べている。すなわち哲学的論理学が理性の機関であり、理性に関係づけられるということから、包括者の諸様式を解明することは、同時に理性の機能を解明することを意味するといえよう。その理性こそが、われわれ自身としての包括者の諸様式を可能にし、とりわけ実存を現実的なものとするのできるのである。

したがって理性は、現存在・意識一般・精神から自覚的に実存へと飛躍する根拠になり、また全体的な交わりの意志として実存的交わりを可能にする。その意味で、理性は常に自己生成の根底にあり、自己実現という課題のために自己存在を持続的に支え続けるものである。

道徳教育は、人間としての生き方を形成することを目的としている。『小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』には、「児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である」⁽²²⁾と記されている。また、『中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』には、「人間にとって最大の関心は、人生の意味をどこに求め、いかにによりよく生きるかということであり、道徳はこのことに直接関わるものである」⁽²³⁾と記されている。つまり、道徳教育は、「人生をどう生きるべきか」の問題であるから、真の自己の実現を目指す自己生成の問題である。そこで、道徳教育は、児童生徒の生き方を形成するために理性に働きかける行為ないし作用であるということができる。したがって、道徳教育は、児童生徒の理性に働きかけ、理性を鍛錬し、理性を開発することを目指す。ただ、児童生徒がどのような生き方を選択す

るかは、自己の主体的な決断にかかっている。その意味で、道徳教育は、決断のための能力を高める要素を持っているといえよう。その過程で、限界状況の自覚や実存的交わり、自己反省、「わがものにすること」が意味を持つ。とりわけ、先人の伝記を資料として道徳の授業を展開し、その中で、児童生徒が、そのような生き方をしたいと願い、自分の目標を見つける契機となる「わがものにすること」は大きな意味を持つ。つまり、児童生徒は、道徳教育を通して、自ら決断をして、人生を切り開いていく契機をつかむのであり、この過程において道徳的实践意欲と態度を養う。

4. 道徳教育と民主主義

ヤスパースの道徳教育論を考える上でも、また今日のわが国の道徳教育を考える上でも、道徳教育の基盤となるのは民主主義であり、また道徳教育は民主主義の維持、発展と強く結びついている。道徳教育と民主主義がいかに関係するかを、ヤスパースの理性と民主主義の捉え方から見ていく。

ヤスパースは、第二次世界大戦後、ナチズムによる独裁体制と恐怖政治への批判の観点から、独自の政治哲学を展開した⁽²⁴⁾。それは、とりわけ全体主義に対する批判に基づき、世界平和のために、自由と民主主義の理念について論究している。ヤスパースは、民主主義は、政治的自由を前提とすることを強調する⁽²⁵⁾。だから、ヤスパースの政治哲学は、基本的に複数政党制を前提とする議会制民主主義と結びつき、唯一の政党による独裁体制である全体主義を斥ける立場にある⁽²⁶⁾。

ヤスパースは、『原子爆弾と人間の将来』（1958）において、人類が原子爆弾を所有してしまった状況に関して、平和を実現し、人類滅亡を阻止するためには、理性への回帰がなければならないと力説する。したがって彼は、「この理性への転向なしには、われわれは終末を見るだけである。人間が最初から見

出し、繰り返し見捨ててきた理性への道を、人間は今や一般に忘れないように注意しつつ再び見つけなければならない」⁽²⁷⁾という。

ヤスパースは、理性と民主主義とは密接な関連があるとして、次のように述べている。「理性は、実効と持続を獲得するためには、国民の中に入り込んでいかなければならない。それゆえ《民主主義 (Demokratie) 》が絶対必要である。民主主義の意味は、一国の国民や諸国の国民相互間の共通の思考と行動において理性を苦心して成就することである」⁽²⁸⁾と。すなわち、国民の理性を鍛錬することは、民主主義を維持、発展するために不可欠なことである。ヤスパースによれば、「もし理性が世界平和によって原子爆弾を無効にするならば、その場合は政治的生活形式としての民主主義によってのみである。」⁽²⁹⁾つまり彼は、民主主義は理性によってのみ成り立つと考える。

ヤスパースの考え方によれば、民主主義の理念である国民主権は、国民の理性による統治を意味する。したがって彼は、「民主主義は、国民における理性を前提とするのであって、その理性こそが民主主義を生み出すべきである」⁽³⁰⁾と述べている。こうして民主主義は理性を前提とし、理性が民主主義を生み出すという思想が、ヤスパースの政治哲学の根底にある。

ヤスパースは、民主主義的な理念においては、政治が理性による自己教育であると考えている。彼は、「すべての偉大な政治は、共同体において理性による自己教育である。この自己教育は、政治家たちの側では、彼らが国民の内にある理性に頼る仕方による教育であり、また彼らの模範による教育である」⁽³¹⁾と述べている。つまり、その自己教育は、国民の理性を根拠とする教育なのである。したがってヤスパースは、「民主主義にとって、この自己教育過程の持続の基礎を置くために、青年の教育、より厳密に言えば全国民の教育

より大切なものはない。この教育に、民主主義と自由と理性がかかっているのである」⁽³²⁾と強調する。このような教育は、民主主義を支える人間の形成を目指して行なわれるべきものであり、理性による自己教育の基礎となるのである。

小学校および中学校の『学習指導要領解説 特別の教科道徳編』には、道徳教育の目標が、民主主義の発展に関係することが記されている。「このように、道徳教育は、人が一生を通じて追求すべき人格形成の根幹に関わるものであり、同時に、民主的な国家・社会の持続的發展を根底で支えるものでもある。」⁽³³⁾なぜなら、民主主義の精神は、国民主権、基本的人権の尊重、自由、平等などの実現によって達成することができるが、それらは、一人一人の道徳的自覚によってはじめて達成されるものだからである⁽³⁴⁾。つまり、民主主義の発展には、国民の自覚と努力が不可欠である。そして、民主主義社会の基本である社会正義の実現に努め、公正、公平に振る舞うことに関する内容項目として、『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』および『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』に、「公正、公平、社会正義」という項目が設けられている⁽³⁵⁾。民主主義における教育は、自覚のある主権者を育成するものとして、望ましい政治の基礎となるのである。

5. 教師と生徒との関係

ヤスパースは、人間の信頼が、生活における前提条件であると考え、次のように述べている。「われわれにとって人間や民族に対する基本的信頼は、有意義な生活の条件である。この信頼は、人間が現にあるように人間に贈られているのではなく、人間が自己自身で生成しうるものに贈られているのである。」⁽³⁶⁾つまり、こうした基本的信頼によって、自己生成が可能となり、実現するのである。信頼関係こそ、道徳教育の基盤となる。『中学校

学習指導要領解説特別の教科道徳編』には、「教師と生徒との信頼関係や生徒相互の温かい人間関係は、生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を日常の学級経営の中で創り出すことによって豊かに育まれていく。また、道徳科における教師と生徒及び生徒同士の心の交流は、学級の人間関係をより一層確かなものにしていく」⁽³⁷⁾と記されている。

ヤスパースが、教師と生徒との教育的関係をどのように捉えていたかは、ソクラテス的教育に端的に示されている。ソクラテス教育では、教師と生徒はまさに、協働の関係にある。この関係は、親鸞の弟子に対する関係である同朋同行者に似ているとも考えられる。

ヤスパースは、「教師の教育と教師の自己教育」について語る際、「交わりによって自己教育をしながら、今なお教育される者だけが生徒を教育するのである。厳しい執拗な学習を媒介にして、この自己教育へと教育される者だけが、正しく教育された人なのである」⁽³⁸⁾と述べている。それゆえ、交わりによって教師と生徒が共に自己生成をしていかなければならない。このように共に歩んでゆく教師と生徒の関係こそ、ソクラテス教育における教師と生徒の関係である。つまり、ヤスパースが理想としているソクラテス的教師は、生徒と同等の水準に立ち、闘争する愛を基盤とした交わりによって生徒を無知の知並びに真理へと至らせると同時に、教師も自己教育をしながら生徒と交わり、またその交わりの中で教育されるのである。

こうした教師と生徒との関係において、たとえば、生徒が自ら乗り越えなければならない危機に直面したり、挫折に陥った時、教師は一人の人間として自らの経験などを語り、生徒を勇気づけることができる。その時、教師と生徒は、年齢や経験や知識の差を越えて、人間同士として向き合う実存的関係に入る。『中学校学習指導要領解説道徳編』には、次

のように記されている。「教育は、教師と生徒との人間的な触れ合いが基本にならなければならない。教師は、道徳的に完成された人格者として生徒に臨むのではなく、生徒をよりよく受容し、理解する態度及び生徒と共によりよく生きる道を求めていく姿を示すことによって、生徒と心が通い合うものである。」⁽³⁹⁾

ところで、ヤスパースにおいては、教師と生徒が共に自己生成をしていく姿勢が基盤となるが、彼もやはり教師の力は大きいと考えている。ヤスパースは、教育の課題と国民の将来について、次のように述べている。「国民がどのようになっていくかには、両親や学校による教育と個々人の自己自身による教育が大切である。国民の運命は、その国民がどのような教師を生み出し、教師をどのように尊重し、またどのような雰囲気の中で、どのような基準と自明さの下で平生を生きるにかかっている」⁽⁴⁰⁾と。民主主義国家においては、学校教育は民主主義の維持、発展のためにも行なわれるが、その教育課題のための望ましい教師をどのように養成するかは、国民の将来にかかわるのである。

ヤスパースは、国家と教育を包み込むものに関して次のように述べている。「自覚的な意志が問題である場合は、あらゆる未来は政治的および教育的な行為に依る。物事の成り行きの前では無力でありながら、物事に影響を及ぼす意志を引き締めるのは、政治的に行動する人間の自己存在の勇氣である。また、人間の本性の前では無力でありながら、伝承の最も深い内実を媒介にして、人間を高貴さに導くために、一切のことをなすのは、教育者の力である」⁽⁴¹⁾と。すなわち、国家の将来は、政治的な行為と教育的な行為にかかっているのであり、とりわけ国民の育成に尽力する教育者の力が大きな役割を担っている。教育者は、理性の展開である民主主義を維持、発展させるため、生徒の理性に働きかけ、生徒を主権者として育成する使命を担っている

のである。

むすび

ヤスパースの道德教育論は、真の自己となることである自己生成が根底にある。自己生成の契機として、限界状況、実存的交わり、ソクラテス的教育、自己反省、「わがものにする事」について考察した。自己生成を根底で支え、それを可能にするのは理性である。道德教育は、人間としての生き方を形成することを目的としている。したがって、ヤスパースにおける理性による自己生成を根拠に、人間の生き方を問う道德教育を考えた。

本稿では、「道德の時間」が「特別の教科道德」となる現状に照らし合わせ、ヤスパースの道德教育論が今日の学校における道德教育に示唆するものを探った。具体的には、他者とのコミュニケーションや自己反省、そして先人の伝記を通して「わがものにする事」により、自己の目標を持つことなどが重要であると考えられた。

ヤスパースの道德教育論において大切なことは、個人の自己生成の在り方を示唆するだけに留まらず、道德教育の基盤となる国家の在り方として民主主義の重要性を強調している点にある。ヤスパースは、理性が民主主義を生み出すと考え、民主主義はすべての人々に政治的自由が保障されることを前提とすることを力説する。したがって、民主主義を維持、発展させるのは、国民の自己教育と教師の力にかかっている。それゆえ、ヤスパースの道德教育論は、理性による自己生成をしている国民が民主主義を形成していくという思惟であり、この点において今日のわれわれの道德教育に重要な示唆を与えているといえよう。

注

- (1) 林田新二『ヤスパースの実存哲学』弘文堂、1971年、1-15頁、参照。
林田新二『実存的倫理学の構想——倫理

学原理論の試み』セイコー企画、2012年、171-188頁、参照

増渕幸男『ヤスパースの教育哲学研究』以文社、1989年、24-25頁、参照。

- (2) K.Jaspers, Philosophie II. Existenz-
hellung, 1932, Springer-Verlag, 4.Aufl.
1973, S.203.
- (3) ibid., S.203.
- (4) ibid., S.230.
- (5) ibid., S.204.
- (6) ibid., S.204.
- (7) 豊泉清浩『ヤスパース教育哲学序説——
ボルノーからヤスパースへ：自己生成論
の可能性』川島書店、2001年、177-184
頁、参照。
- (8) K.Jaspers, Die Idee der Universität,
Berlin Springer-Verlag. 1946, S.48-49.
- (9) K.Jaspers, Philosophie II, a.a.O., S.37.
- (10) ibid., S.37.
- (11) K.Jaspers, Die geistige Situation der
Zeit, 1932, Walter de Gruyter · Berlin ·
New York, 5.Aufl. 1979, S.112-113.
- (12) 前掲、増渕幸男『ヤスパースの教育哲
学研究』、445-446頁、参照。
- (13) K.Jaspers, Philosophie I. Philosophi-
sche Weltorientierung, 1932, Springer-
Verlag Berlin · Heidelberg ·
New York, 4.Aufl. 1973, S.285.
- (14) ibid., S.286.
- (15) K.Jaspers, Die großen Philosophen.
Erster Band, R.Piper & Co. Verlag,
München, 1957, 3.Aufl. 1981, S.56.
- (16) ibid., S.31.
- (17) ibid., S.35.
- (18) 豊泉清浩「偉人の生き方に学ぶ道德教
育——ヤスパースにおける「わがもの
にすること」概念を手がかりとして」、『道
徳と教育』第329号、日本道德教育学会、
2011年、107頁。
- (19) K.Jaspers, Philosophie II, a.a.O., S.234.

- (20) 前掲、豊泉清浩『ヤスパース教育哲学序説』、279-282頁、参照。
- (21) K.Jaspers, Von der Wahrheit, R. Piper & Co. Verlag, München 1947, 3. Aufl. 1983, S. 119.
- (22) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、18頁。
- (23) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、16頁。
- (24) 前掲、増渕幸男『ヤスパースの教育哲学研究』、326-379頁、参照。
増渕幸男『ナチズムと教育——ナチス教育政策の「原風景」』東信堂、2004年、参照。
- (25) K.Jaspers, Die Atombombe und die Zukunft des Menschen. Politisches Bewußtsein in unserer Zeit, R. Piper & Co. Verlag, München, 1958, 1982, 7. Aufl. 1983, S. 429.
豊泉清浩「ヤスパース教育哲学における理性の展開——世界哲学の理念の観点から」、池田稔記念論集編集委員会編『教育人間科学の探求』学文社、2011年、37-40頁、参照。
- (26) Vgl. K.Jaspers, Im Kampf mit dem Totalitarismus, 1954, in: K.Jaspers, Philosophie und Welt. Reden und Aufsätze, R. Piper & Co. Verlag München, 1958, 1963, S. 76-96. カール・ヤスパース、斎藤武雄訳『真理・自由・平和』〔ヤスパース選集21〕理想社、1972年、91-121頁、参照。
- (27) K.Jaspers, Die Atombombe und die Zukunft des Menschen, a.a.O., S. 418.
- (28) ibid., S. 419.
- (29) ibid., S. 419.
- (30) ibid., S. 423.
- (31) ibid., S. 444.
- (32) ibid., S. 444.
- (33) 前掲、『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、1頁。
前掲、『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、1頁。
- (34) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編 (平成20年8月)』東洋館出版社、2008年、26-27頁、参照。
文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編 (平成20年9月)』日本文教出版、2008年、27頁、参照。
- (35) 前掲、『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、50-51頁。
前掲、『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、45-46頁。
- (36) K.Jaspers, Was ist Erziehung? Ein Lesebuch. Textauswahl und Zusammenstellung von Hermann Horn, 1977 R. Piper & Co. Verlag, München 2. Aufl. 1982, S. 81.
- (37) 前掲、『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 (平成27年7月)』、74頁。
- (38) K.Jaspers, Was ist Erziehung?, a.a.O., S. 183. ヤスパース、増渕幸男訳『教育の哲学的省察』以文社、1983年、158頁。
- (39) 前掲、『中学校学習指導要領解説 道徳編 (平成20年9月)』、117頁。
- (40) K.Jaspers, Was ist Erziehung?, a.a.O., S. 74.
- (41) ibid., S. 85-86.

参考文献

1. カール・ヤスパース、飯島宗享・細尾登訳『現代の政治意識——原爆と人間の将来〔上巻〕』(ヤスパース選集15)理想社、1971年。
2. カール・ヤスパース、飯島宗享・細尾登訳『現代の政治意識——原爆と人間の将来〔下巻〕』(ヤスパース選集16)理想社、1976年。
3. 教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000年。